

【研究ノート】

私のスピノザ研究の覚書 (四)

—属性について—

藤 本 吉 蔵

目 次

- 一 プロローグ
- 二 第一作業
- 三 第二作業
- 四 第三作業
- 五 エピローグ

一 プロローグ

第二章「substantia (zelfstandigheid) 即神について」で、スピノザによるデカルト思想の継承と乖離という観点を念頭に置きながら、「短論文」及びその第一“Appendix,” Henricus Oldenburgius 宛書簡（第二書簡）への“Saepimentum,” 或は「エチカ」等の文献を比較検討することによって、substantia と等置される神についての梗概内容を剖見してきた。それは、内容的にいて、当時神学者達が自己の想像力を駆使して人間生活の規範となるべき神の attributa (eigenschappen) として立証していた、唯一の (een)・永遠な (eeuwig)・全知の (alwetende)・全能な (almagtig)・単純な (eenvoudig)・無限な (oneyndig), 或は万物の原因 (een oorzaak van alle dingen) 及び最高善 ('t opperste goet) 等々の概念はあるものには属しはするがそのものの何たるかを認識せしめる所以の attributa を示さず、ただ若干の propria を表わすにすぎないということで、即ちそれらは神にのみ特有であるとはいえるものの、しかし我々はそれら propria をもってしても神の本質の何たるかを真に知るこ

とができないという点で、それらは神の *wyze* (*modificatio*) を意味する言葉にすぎないものとみて神の本質から峻厳に区別しながら、存在するものとして *substantia* とその *attributum*, 並びに *modus* が掲げられるが、*modus* は他のもののなかに在り、また他のものによって理解され、時間的・有限的に存在して個物という名で呼ばれるのに対し、*attributum* は自己の類において無限で *substantia* の本質を構成し且つその力を表現しているものと知性が認めるもの、*substantia* は永遠で絶対であり、存在する為に自分の概念以外のものを前提としない自己原因であって、在るものは総て *substantia* のなかに在り、何ものもそれ無しには存在も理解もできないという *substantia* 中心の全体観、言い換えれば「神即自然」を構図とするものであったといってもよい。しかも、論理的にみて、それは存在を本質とする *substantia* たる神についての理論を構築するにあたり、デカルト第三省察の存在論的証明方法の色彩が濃く、また *substantia* 複数説の採用という点で、未だスピノザ独自の理論の完成をみなかった「短論文」から、第一“Appendix”や“Saepimentum”での紆余曲折を経て、「エチカ」でようやく完成を見るにいたったと判断してもよいものであった。^① 言うまでもなく、そこでは、前章で検討した如く、1660年乃至1661年頃に完成をみた「短論文」の後、また1662年頃に執筆が開始される「エチカ」の前に、完全な脱稿を断念しなければならなかった程の極めて重大な問題に直面して、苦悩しながら練りに練りあげた「動態的幾何学的方法論」の導入がデカルト方法論から離れて彼独特の形而上学へと進展させるに大きな要因となっていたものと推測できよう。^②

ところで、スピノザは「改善論」で総てのものの出発点として神の定義を念頭に置きながら、定義が完全といわれる為には事物の内的本質を必然的に明らかにしなければならず、本質の代りにある *propria* を以ってすることのないように注意を払う必要があると前置きしながら、創造された事物 (*res creata*) を定義する場合の二条件、並びに非創造物 (*res increata*) 定義の為の四箇条からなる必須項目を掲げて、定義は事物の實在的可能性を把握する概念であるとともに、事物の内的本質乃至内的構造をそれ自身から或はその最近原因から必然的

且つ *génétiq*ue に明らかにするものでなければならぬと考^③えている。しかしながら、こうした諸条項に照らして、実際に *substantia* たる神の定義を行う場合、1674 年に Jahrig Jelles へ宛てたスピノザ書簡の一節にみられる *figura non aliud, quàm detrminatio, et determinatio negatio est* という命題が問題とな^④ろう。というのは、神の本質を表象的即ち知覚的観点に立って数量的に定義する場合^⑤、或はまた Robinson が指摘する三種の規定の内の「原因による限定」に基^⑥づいてその本質を定義する場合には、勿論双方とも当該定義四条項に抵触することになる故、全く問題の次元にさえ登らないが、ヘーゲルのスピノザ解釈^⑦のように、全く無規定・無内容こそが神の本質を表わすという視座、言い換えれば、“Ontologie” 的 *substantia* たる神の本質は何の限定も受けず、その結果、その本質を積極的且つ肯定的に定義することが不可能であるという見解も成り立ちかねないからである。その観点に立^⑧てば、スピノザの *substantia* としての神は形而上学的空虚を表わすことになり、*modus*こそがその限定を担^⑨うことになるのであろうが、結果的にその視座では、空虚な *substantia* としての無から *modus* たる有が生じるという奇妙な論理に陥ってしまうことになる。スピノザはこのことを意識してか、量や原因にもとづく *substantia* の限定を避けるとともに、然りとて静態的に *substantia* を空虚とみる視^⑩点に立つこともなく「神をして神たらしめる所以の *eigenshappen*」に着目し、極めて内容の豊かな *substantia* の定義を試みている。即ち、「エチカ」第一部定義六で「神とは絶対無限な存在者 (*ens absolute infinitum*)、言い換えれば各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの *attributa* からなっている *substantia*」と定義づけ、その説明として「私は自己の類において無限なとはいわないで絶対に無限なという、何故なら、単に自己の類においてのみ無限なものについては、我々は無限に多くの *attributa* を考えることができるが、これに反して、絶対に無限なものの本質には本質を表現し何の否定も含まないあらゆるものが属^⑪するからである」と述べているのである。してみると、Robinson の説でい^⑫うところの *attributa* による *substantia* の本質についての「質的限定」をスピノザは意図していると判断してもよいと思える。

扱て、このように、絶対無限な神の定義を類において無限な attributa から規定しようと試みた場合、正に工藤教授が指摘する如く、スピノザの substantia は無内容ではなく無限に豊富な内容をその attributa を通して顕現することになり、それ故「その全体から一箇の存在を抽象し、限定する」行為は否定の意義を持つものとさえいえることができようが、問題なのはこの attributa をどのように捉えるかという課題である。zelfstandigheid と eigenschappen とを全く混同し二者を明確に区別していなかった「短論文」の箇所は別としても、「エチカ」第一部定理十五及び同二部定理七それぞれの scholium では attributum を規定するうえで corporea substantia 即 substantia extensa という概念を用いている文章が散見されるし、また「短論文」第一部第八章や「エチカ」第一部定理二十九の scholium 及び同部定理三十一の証明に於ては attributum の概念を natura naturans の範疇に入れて取り扱っている視点もあり、更に何よりも況して、「エチカ」第一部定義四並びに同部定理十の証明の中で attributum とは知性が substantia についてその本質を構成していると知覚するものであり、従って各々の attributa はそれ自身によって考えられなければならないという見解や、substantia の有する総ての attributa は常に同時にその substantia の中に存し且つ各々はその本質を表現するという視点を明確に規定している記述から、一応、是迄に多くのスピノザ研究家が指摘している様に、attributa は内容的にいつて明らかに神の本質を意味するものと判断してもよいと思える。

だが、ここには極めて多くの難問が横たわっているといつてよい。例えば、「知性が substantia についてその本質を構成していると知覚するもの」として attributum を定義する場合、この知性とは無限知性を示すのかそれとも我々の有限知性を意味するのかという解釈上の問題、或は「神即自然」のテーゼに基づいて「連続的物体の自然現象」を説くスピノザにあっては神の本質たる attributa としての不可分性を特徴とする extensio と物的な可分性の概念を含有する res extensa との関係をどのように解決するのかという課題、無限定的無限で代表される様な当時の種類の無限概念と attributum 及び substantia の無限性との混同の回避と整理、更にまた内容的に同質を意味するにも拘らず、

絶対無限たる substantia が単一性を示すのに比べて attributum は「自己の類に於て無限」という規定が内包する否定性を有し且つ無限多様性を特徴とするという矛盾の処理等である。

そこで、この章では、こうした諸問題の検討という観点から、スピノザの各文献上に見られる attributum についての梗概内容把握作業を遂行し、その特徴を開陳したいと思う次第である。

二 第一作業

スピノザは attributum の存在を無限数としながらも、「短論文」第一部第二章、「エチカ」第一部定理十四の corollarium II 及び同第二部定理一・二でデカルトの mens と corpus の二元観に倣い、人間の知性によって認識されるものとして cogitatio (Denking) と extensio (Uytgebreidheid) の二つだけを掲げている^①。しかも彼はこれらの attributa が substantia の本質を担うという点で「一が他の助けを借りずに」即ちそれらが実在的に区別され得るとしても、あくまでも唯一の substantia に属し且つ唯その類に於て無限定な無限として考えている^②。例えば、彼に従えば、自然の中に存在する円と、同様に神の中にあるこの存在する円の観念とは同一物であり、それが異なった attributa によって説明されるに過ぎない。それ故、我々には自然を sub extensionis attributo で考えようと、或は sub cogitationis attributo で考えようと、諸原因の同一の秩序詰り同一の連結を見出し得るのであるが、実際に円の観念の形相的有はその最近原因としての per alium cogitandi modum 知覚され、こうして得られたこの modus は更に他のそれによって知覚されるというように無限に進み、こうして物が cogitandi modi として見られる間は全自然の秩序或は原因の連結は per solum cogitationis attributum 説明されなければならないし、物が modi extensionis としてみられる限りは全自然の秩序もまた per solum extensionis attributum 説明されなければならないことになる^③。言い換えれば、自己の類において、corpus は aliud corpus によって規定され、cogitatio は alia

cogitatio によって限定されることになるのである。^④ところで、こうした視座に立てば、attributa の具体的な性質は有限或は無限な連続的因果の現実的存在としての modi から示されることが看取されるとともに、^⑤ΑΡΙΣΤΟΤΕΛΟΥΣ ΦΥΣΙΚΗΣ, IV ; 4,212 a, で説く τὸ πέρας τοῦ περιέχοντος σώματος という τόπος としての κενόν ^⑥理論や De l'infinito, universo e modi, dialogi V の中で Filoteo (Teofilio) と Fracastorio 或は Albertino 等によって論議されている非物体の aether (etere) の空間、^⑦言い換えれば “extensio sine substantia corporea” の否定が考えられ得よう。^⑧従ってまた、こうした見解のもとでは、可分性を特徴とする物体的延長という概念と無限若しくは無限定な attributum という理念とは矛盾するのではないのかという疑問が生じると思える。彼は、「デカルト哲学原理」では「物質の無限分割」に関するデカルト理論を継承しながら、物質の本性は extensio に存在し、そして extensio はどんなに小さいものでもその本性上分割し得るから、物質的部分も例えどんなに小さいものでもその本性上分割しえることになり、^⑨従って atomus の存在は否定されると表明し、物質即 extensio を論じているが、「短論文」や「エチカ」では一方で物質の分割性を容認しながら、他方では extensio の不分割を主張し、新たに^⑩彼独自の視座から結果的に、vacuum や atomus の否定を説くに至っている。そして、特に、その場合の基点となっているのが、以下に詳細に説くように、extensio を自然学的な観点に立って捉える「運動と静止」という概念であり、或はそれを数量的視点で認識する「全体と部分」及び「可分・不可分」という^⑪範疇である。^⑫蓋し、werkende oorzaak を特質とする「神と自然」とを等置するスピノザの立場としては、運動の直接原因を自然の内に詰り in extensionem ipsam 求める必要があり、従って、初めデカルトの二元論的要因を踏襲して近代的自然観を構築しようとしたものの、物質の運動と静止の原因を神に求め、extensio をして空間を充す静的な物質と見做なす如き理論は到底受け入れ難くなったものと思えてならない。

扱て、彼は「短論文」第一部 第二章で、「我々が uytgebreidheid を een eigenschap van God と認^{したた}めていること、しかしこのことは完全なる実有には

決して適当でないように見える。というのは、uytgebreidheid は可分的であるから、そうならば完全な実有が部分から成立することになるが、それは神には全然当てはまらないのである。何故なら、神は単一な実有であるからである。その上、uytgebreidheid が部分に分かたれるなら受動的なものになり、これまた神に起こり得ないのである。神が物質の第一の能動的原因である以上、神は非受動的であり、何ものからも働きを受けることがないのだから^⑬という疑問を掲げ、その対応として、

- (一) 部分とか全体とかは真の有乃至実的有ではなくて、単に理性の有(wezen van reeden, ens rationis)^⑭に過ぎない。従って自然の中には全体も部分も存在しない。この場合自然の中にというのは zelfstandige uytgebreidheid の中という意味である。若しこの zelfstandig uytgebreidheid が分割されるなら、その本性乃至本質は忽ち破壊されるであろう。それは無限なる uytgebreidheid に於てのみ存するのだから^⑮。
- (二) 種々の部分から合成された物はその部分を一つ一つとってみる時、「一が他なしに」考えられ理解され得るようではなければならない。例えば、多くの異なる歯車・紐・その他から合成されている時計にあっては、各々の歯車や紐等がそれだけで考えられ且つ理解され、その合成から出来ている全体はそうした理解に必要はない。……しかし zelfstandigheid である限りの uytgebreidheid は部分を有するとは言われ得ない。それは本性上無限でなければならない以上、より小さくも或はより大きくもなり得ないし、しかもまたその如何なる部分も個別的には理解され得ないからである。……自然における部分に関しては分割なるものは決して zelfstandigheid zelve の中には起こらず、常にただ wyze van de zelfstandigheid の中にのみ起こる。従って、我々が水を分割しようと欲する場合、単にその wyze^⑯を分割するのみであって zelfstandigheid zelve を分割しはしないのである。
- (三) 分割乃至受動は wyze の中にのみ起こる。例えば、人間が消滅する或は亡ぼされると我々がいう場合、それは有限な一合成物であり wyze van de zelfstandigheid である限りに於ての人間をのみ眼中に置いているのであっ

て、人間の依存する *zelfstandigheid* を念頭に置いているのではない。^⑰
との三点を立論しているのである。特にこの対応理論から解されることは、スピノザは、無限に多くの部分に分割されるというような、言い換えれば有限の連続からなる無限延長を意味する無限定的無限 (*indefinitum*) が示す無限性とは全く異なる、*inblyvende oorzaak van God* からくる *a natura infinitum* を基底にした *in suo genere infinitum* の積極的な肯定に裏打ちされた *uytgebreidheid* の不可分性を意図し、^⑱ それに比べて可分性は必然的に全体として連結・調和されている *wyzen* においてのみ存在するという視座に立つとともに、*uytgebreidheid* に関しては歯車や紐等の諸部分から合成されている全体としての時計というような全体と部分の関係構図は存在せず、ただ原因と結果の関係が存在するに過ぎないと結論づけているものと推測し得る。^⑲ 蓋し、彼の理論にあっては、総ての物体はそれが一定の仕方で規定されて存在する限り、全宇宙の一部であって、それはその全体と調和し、またその他の諸物体と連結すること、そして宇宙の本性は絶対に無限であるから、宇宙の部分はこの無限な力の本性 (*hec inhinitae potentiae natura*) によって無限の仕方で規定され且つ無限の変化を受けなければならず、しかも *zelfstandigheid* という観点からみれば各々の部分はその全体の一層緊密な合一を持ち、更にまた自然の中には思惟する無限の力 (*potentia infinite cogitandi*) が存在し、この力は無限である限りに於て全自然を自己内に *objective* に包含することになるのである。^⑳

ところで、「エチカ」第一部定理十五 *scholium* でスピノザは *substantia extensa* を *attributum Dei* とする彼の帰結に対して向けられると思われる諸駁論を掲げ且つそれらの論理の不条理な点を指摘しながら、*extensio* の可・不可分性に関する彼独自の見解を明らかにしている。先ず、彼は論駁者達の視点を次の二点に要約しているのである。即ち、第一に、例えば図1の様に、無限である *substantia corporea* が二つの部分に分割されたと仮定する場合、その各部分は有限か無限かのどちらかを意味すると推量できようが、若し各部分が有限であると見做せば無限のものが二つの有限な部分から成ることになって不条理であるし、かといって無限であると想定すれば、ある無限のものより二倍

substantia corporea
(substantia extensa)
↓
substantia corporea

substantia corporea

図 I

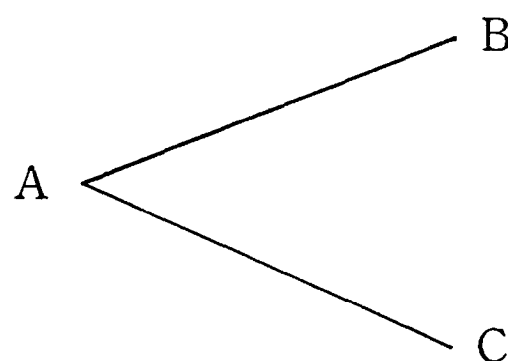
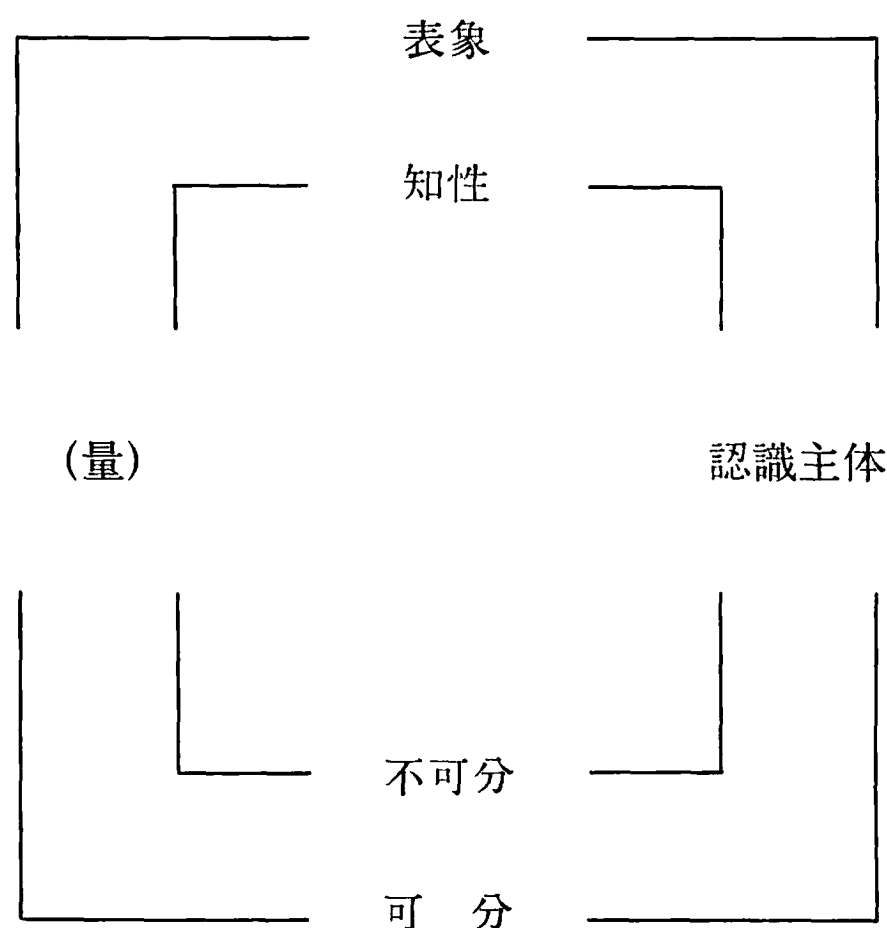


図 II Ethica, I;
prep. 15, p. 58.

の大きさの無限のものが存在することになる故、これまた不条理な見解といえる。次にまた、若し無限に多くの量をインチやフィート単位で測るとそれは無限に多くのインチ (digiti) やフィート (pedes) から成るに相違ない。従って、一つの無限なる数より十二倍大きいことになり矛盾に陥るし、更に図 II の如く、若しある無限の量の中の一点から発する A B・A C のような二線が初めはある一定の距離をもって遠ざかりつつ無限に延長されると考えるならば、B と C との間隔は絶えず増大してゆき、ついには限定された距離から限定され得ぬものになるであろうといったふうに、論駁者達は “substantia corporea, quatenus substantia, constat partibus” と思っている。それ故、彼らはそれが無限であり得ることを、従ってまた神に属し得ることを否定する^{②①}。第二に、論駁者達は神が最高完全な実有であるから働きを受けることが出来ないのに比べて、substantia corporea は分割可能であるから働きを受けることができ、故にそれは神の本質に属しないと論理づけている^{②②}。詰り、彼らは substantia corporea は神の本性に相反すると見做しているのである。これに対してスピノザは、彼らの論理が substantia corporea は部分から成るという仮定の上にのみ立っていることを指摘しながら、更にそうした仮定の根底になっている理論は決して無限なる量を実質的に仮定することから生ずるのではなく、寧ろその量を測定することが可能であり且つそれは有限な部分から成っていると仮定する事から生ずる^{②③}ということを明らかにした上で、若し substantia corporea はその諸部分が実在的に区別され得るようなふうに分割可能なものであると想定すれば、その一部分が消滅しても他の部分が以前として前の様に相互に結合し続けている

ことも、言い換えれば「一が他なしに在り得ることも」不可能ではなくなるであろうし、また vacuum が出来ないようなふうに総ての部分が結合しなければならぬ^{②④}という理由もなくなるであろうと主張して、そうした可分的な量として infinita extensio の取り扱いを拒否している。蓋し以上の見解からも明らかのように、substantia corporea の実在的分割という状況下では、自然における部分及び全体はそれぞれ相互に孤立した断片的な個物と見做されて部分相互或は部分と全体との有機的連関が無視されることになり、^{②⑤}それ故、vacuum や atomus を否定するスピノザにとって、substantia をこのように実在的に区別するというような理念は当然受け入れられないのである。

スピノザに従えば、そもそも我々は量を二様の仕方で考える傾向にあるが、このことを明晰判明に理解しないで事物を考えることにより、既述のような諸論駁者が主張する如き論理が構築されるのである。^{②⑥}その二様の仕方とは、図Ⅲ



図Ⅲ 二様の認識仕方

で示されるように、一つは表象認識に基づいて量を抽象的に或は皮相的に把握する場合であり、^{②⑦}他は知性を通してそれを substantia として考える方法である。例えば、彼によれば我々が表象力即ち感覚や知覚に基づいてあるがままの量を心に留めるなら、デカルトの extensio 概念同様に、^{②⑧}それは有限で可分的な部

分から成るものとして現われるであろう。^{②⑨}というのは、自然の中にある総ての事物及び観念は我々の漠然たる経験による意見の対象として、「その可滅性・偶然性・可能性においてのみ考察される」^{③①}からである。^{③②}これに反して、知性を通して量を認識する場合、それは不可分的・必然的・無限なものたる *substantia* として把握されることになる。なぜなら、第三章「『知性改善論』の分析」で検討した如く、知性はものの本質を或は本性を最高完全者の観念に基づいて、永遠の相のもとに (*sub quadam specie aeternitatis*) 絶対的に知覚し無限性を表現するからである。^{③③}従って、知性の下では物質は至るところで同一であって、その部分は物質が色々な風に変状すると考えられる限りに於てのみ、言い換えれば、*modaliter* にのみ区別されるのであり、実在的には全然区別されないことになるのである。例えば水は *modus* としてのみ分離され、分割され、或るいは生じ且つ滅するが、*substantia* としては生ずることも滅することもないのである。^{③④}かくして、スピノザは認識主体側の認識の仕方によって、同一対象物を有限物として或は無限物として区別して、詰り対象物そのものを可分性を含む物質或は不可分性を特質とする非物体的量として捉えて、一見矛盾するような *extensio* の不可分性という理念を明瞭に論証したのである。^{③⑤}

三 第二作業

1663年4月20日付 Ludovico Meyer 宛返書^①の中で、スピノザは一般に人々が無限についての検討を試みる上で解決の極めて困難な壁に直面しておびたらしい誤謬と混乱に陥ってしまっている現状について触れ、その原因は、先ず第一に、彼らが同じ無限なものといっても、自己の本性によって或は自己の定義の力によって無限であるものと、何らの限界も有しないがそれは自己の本質の力によるのではなく自己の原因の力によってそうであるものとを区別しなかった為であり、次に彼らは、何ら限界を有しないということで無限であるといわれるものと、たとえその最大限と最小限が我々に解っていてもそのものの部分がいかなる数を以てしても算定し且つ説明することの不可能なものとを区別し

なかった故であって、最後にまた、彼らは単に我々が理解し得るのみで表象し得ないものと、我々が表象をもなし得るところのものとを区別しなかったことに由来する、といった図IVに示されている様な種々の無限概念に関する当該問

自己の本性或は定義の力に基く無限	自己の原因の力による無限
無限界な無限	最大限と最小限を把握し得るが算定不可能な無限
表象不可能な無限	表象可能な無限
分割不可能な無限	分割可能だが矛盾のない無限
比較不可能な無限	比較可能な無限

図IV Supinoza の無限概念の区別

②
題の整理の不備に基づいて生じているものと指摘している。彼に従えば、若し人々がこうした諸区別に注意を傾けていたなら、先ず、いかなる無限なるものが何らの部分にも分かれたれ得ず、或は何らの部分をも持ち得ないか、これとは反対に、いかなる無限なるものが部分を有し且つ部分を有することによって一向に矛盾を引き起こすことがないかを理解できたはずであり、更にまた、いかなる無限なるものが何の困難もなしに他の無限なるものより一層大であると考えられ得るか、反対に、いかなる無限なるものがそうはいかないかをも当然把握できた筈である③と推測し得るのである。

ところで、「神とは絶対に無限なる実有、言い換えれば各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの attributa から成っている substantia である」という「エチカ」第一部定義六④や同第一部定義三で「substantia とはそれ自身のうちに在り且つそれ自身によって考えられ得るもの、言い換えればその概念を形成する為に他のものの概念を必要としないものと解する」と論断している箇所⑤、また「短論文」第一部第三章での主要課題として八種類に分類しながら取り扱っている起成原因 (de werkende oorzaak, causa efficiens) のうちの特に第四と第六及び「神は万物の必然的原因であり、万物の本性は現にある本性と違ったものであり得なかったこと、或は神から他の形式や秩序で生じせしめ

られ得なかったこと」を説明している同第一部第四章^⑦、更に「エチカ」第一部定理三十三の scholium I・II で神のみが第一原因であり、他の外的原因を必要としないで自己自身の本質乃至定義から必然的に存在するという内容を記述している文節^⑧、且つまた「知性改善論」での「定義が完全と言われる為には事物の内的本質を明らかにしなければならない」という件等から鑑みて、スピノザは「神即 substantia 即存在即本質即定義」という構図を構築しようと企てているものと推測してもよいと思える。ところが、この視点を既述の様なスピノザの指摘する無限概念の区分に照らし合わせてみた場合、彼は明らかに自己の本性は定義に基づく無限並びに比較不可能な無限として、絶対的に無限な substantia たる神を想定しているものと判断することが出来る。しかも「エチカ」定義六の説明で「私は『自己の類に於て無限な』とはいわないで、『絶対に無限な』という、何故なら単に自己の類に於てのみ無限なものについては我々は無限に多くの attributa を否定する事ができるが、これに反して、絶対無限なものの本質には本質を表現し且つ何の否定も含まないあらゆるものが属するからである」^⑩と態々記述していること、或は同第一部に「infinita substantia は不可分である」という定理十二・十三を設けている点^⑪、更に「我々は神を認識することは可能であるが、それを表象するのは不可能である」と説明している Hugo Boxel へのスピノザ書簡から、その substantia たる神には分割可能な数量的概念を含めることができず、また表象することも不可能であるとスピノザは考えているものといえよう。正に彼にあっては表象概念の範疇に入る数の概念を substantia に帰せしめることはできないのであろう。

扱て、自己の原因の力による無限とは自己の依存している原因の力によってのみ無限を意味するが、それには、当然、「自己の本性或は自己の定義の力による無限」たる substantia の本質を表現する「自己の類に於る無限」^⑬としての attributum と attributum を自己の原因とする modus infinitus とが該当するのではないのかと推測し得るが^⑭(図 V 参照)、ここでは本稿の課題である「自己の類に於る無限」即ち attributa の無限性についてのみ取り扱うことにする。但しその場合注意しなければならないのは、無限定としての無限 (indefinitum

seu indeterminatum) 図VI^⑮ と infinita attributa とを混同しないように心掛け

自己の原因の力による無限		
無 限 界	表 象	可
	分 割	可

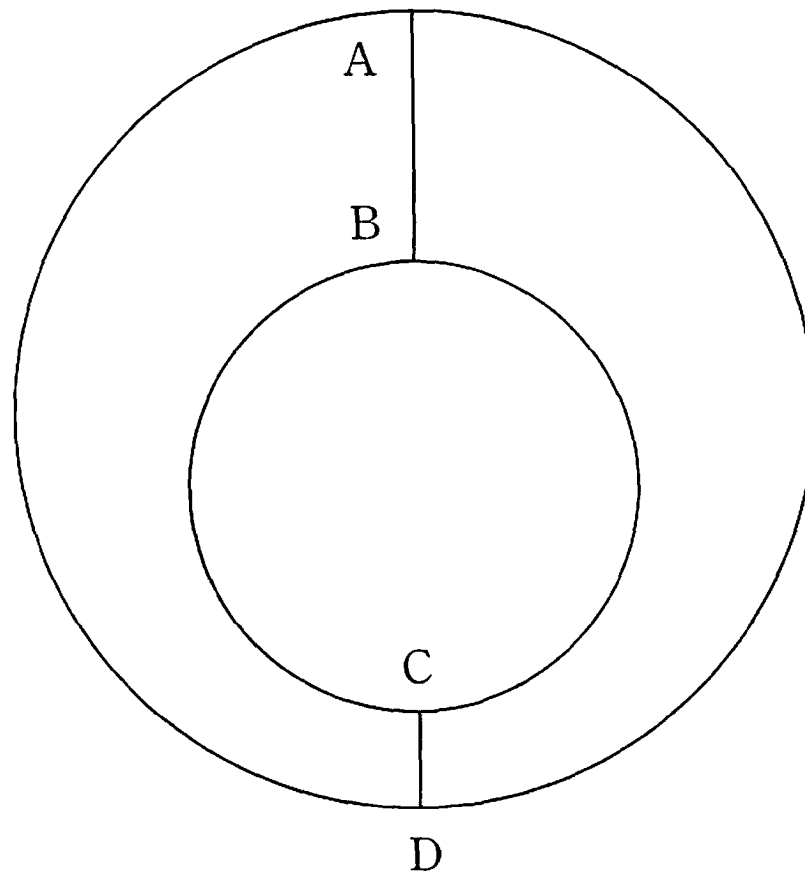
図V

最大限と最小限を把握し得るが算定不可能
表象可能な無限
分割可能だが矛盾のない無限
比較可能な無限

図VI

る必要があるということである。書簡十二よれば、自己の原因の力による無限とは、そのものが依存している原因の力によってのみ無限であり、そしてそうしたものは、その原因から抽象される場合には部分に分割されて有限なものに見做されるのに対し、無限定的無限とはどんな数を以てしても算定され得ない^⑯ 為に無限といわれる性質のものである。例えば、スピノザに従えば、我々は量を substantia から抽象して考え、また持続をそれが永遠なる諸物からでてくる様式から分離することにより、時間及び大いさという概念が生じるが、このうち時間は持続を、また大いさは量を出来るだけ容易に表象し得るように限定する^⑰ のに役立つ。次にまた、我々が、substantia の諸状態をそれ自身から分離してこれを種類に分かつということから数という概念が生じるが、これも substantia の諸状態を限定しこれを出来るだけ容易に表象し得る為のものに他ならない^⑱。かくして以上の事から、大いさ・時間・及び数は単に cogitatio の様式、表象の様式に過ぎないということが明瞭になる。詰り、表象の有 (entia imaginatio) 乃至理性の有 (wezen van reden) に他ならないということが解されるのである。従って、同書簡で彼が Meyer に対し指摘しているように、この有を実在的有から区別しないで持続を抽象的に考え且つこれを時間と混同しながら部分に分割し始めるとしたら、ある時間がどのようにして過ぎ去り得るかを決して理解することが出来ない羽目に陥ることになるろう。というのは、ある時間が過ぎ去る為には、先ず、その半分が過ぎ去らねばならず、次いで残りの半分が過ぎ去る必要があり、このようにして時間の終に到達不可能な事態^⑲ に陥ってしまうことが予想されるからである。詰り、そのことは、数は一切を

規定することが出来ないという視点の証左を意味することになるといってもよいと思えるし、しかも数を超越するものが存在するという点で、数が表現され得ない総てのものが必然的に等しくなければならないとはいえないから、その相互間で一切が他より大であるとも考えられ、従って無限定的無限は比較可能な性質そのものと判断することができよう。この点については、特に「デカルトの哲学原理」第二部で、定理五の scholium に於る無限定 (indefinitum) についての説明を踏まえたうえで、水道管を例に取り打ち立てている流体運動に関する定理九・十・十一からも明瞭に把握することが可能である。即ち、そこでスピノザは、若し図Ⅶのような環状の道管が水で満たされ、そしてAに於る



図Ⅶ S-D.P.P., I; p. 198. Ep. 12, p. 58

水が「道管AからB Cを通して運動する(とすれば、その)流体は無限定的に多くの速度段階を取る」ことになろう、^{②④}「それはAとBとの間の空間が至るところ不等であり、従って流体が道管A B Cを通して運動する速度は至るところ不等」^{②⑤}になるからであると推測し、更にまた、我々はAとBの間には次第に小さくなる無限定的に多くの空間を想定し得るから、^{②⑥}至るところにあるその空間的不等性を無限定的に多く考えることができ、^{②⑦}それ故「A B Cを通して流れる物質は無限定的に多くの小部分に分割される」^{②⑧}と帰結しているのである。この

例は最大限 A と最小限 B との間に見られる不等な距離の総数及びそのなかで運動する物質が受けなければならない不変化の総数はあらゆる数を超越するという²⁹こと、詰り異なった中心を有する二つの円の間に²⁹ある空間の本性が不等な距離の一定数を許さないということ²⁹を意味するものと考えてもよいといえる。蓋し、彼に従えば、最大限と最小限を把握できても我々の知性では無限定的無限としてのその変化の総数を算定することは不可能なのであり、従って終局的に、無限定的無限の構図は図 VI で示されるような仕組を表わすと考え²⁹る事が出来るのである。

ところで、attributa について考察する場合、こうした無規定・無限定的「不可知」という観点を「自己の原因の力による無限」という概念の解釈に適用して混乱を引起さないように注意する必要がある。スピノザは「エチカ」第二部定理三で「神のうちには必然的に神の本質の、並びに神の本質から必然的に生起するあらゆるものの、観念が存在する」³⁰と規定し、それは「神が無限に多くのものを無限に多くの仕方³⁰で思惟し得る。或は神の自己の本質に関して、並びに神の本質から必然的に生起するあらゆるものについて観念を形成し得る。ところが神の力の中にある総てのものは必然的にある。故にそうした観念は必然的に在り且つ神の内にのみ在る」³¹といえるからであると説明を加えている。詰り、これは神が自己を認識することが神の本性の必然性から起こる様に、神が無限に多くのことを無限に多くの仕方で行なうこともまたそれと同一の必然性を以て起こることを意味することになろう。こうした視座から、「attributum とは知性が substantia についてその本質を構成していると知覚するものと解する」³²という「エチカ」第一部定義四を解釈すれば、それは神による「自己の類に於る無限たる」attributa についての必然的³³自己認識詰り substantia と attributa との同一を意味するものと判断してもよいと思えるし、しかも当然ここでの知性とは我々の知性ではなく神の知性を意味することを明瞭に読み取ることも可能であろう。事実、彼はこのことを意識してか、「エチカ」第一部定理十六で神の本性は各々が自己の類に於て無限の本質を表現する絶対無限数の attributa を有するから、この故に、「神の本性の必然性から無限に多くの

③④
ものが無限に多くの仕方では必然的に生じなければならない」と述べた直後に、
「この帰結として、神は無限の知性によって把握され得る総てのものの起成原因③⑤
であることになる」という corollarium I を態態付加しているのである。従③⑥
って、桂教授が指摘しているように、attributum を人の有限な知性という観点
から捉え、substantia たる神そのものを無規定・無限定なものとして、「何れ
かといえは不可知論的な態度③⑦」を取るべきではないと判断する必要があること
になる。神の無限の知性③⑧に基づいた自己認識という観点で infinita attributa
が存在するのである。言い換えれば、attributa は substantia に帰属しそのな
かで実在する③⑨という仕組であり、逆に substantia は attributa を通して自己を
表現する構図となっている。彼が書簡三六のなかで「自己の類に於てのみ無限
定で完全なある存在が自己の能力によって存在するということを我々が認める
なら、その時我々は絶対に無限定で完全なある実有にも現存在を認めなければ
なりません。私が神と呼ぶのは正にこの存在の④⑩こととす」と記述しているのも
その為であろうと推測し得る。

四 第三作業

扱て、G. H. Scheller は 1675 年 7 月 25 日付スピノザ宛書簡^①で無限数の attributa 問題について触れているが、その中で特に彼は「我々は神の attributa のうち cogitatio と extensio だけしか認識し得ないということを ad impossibile^② deducere ではなく何らかの直接的証明によっては明らかにしていただきたい。更にこのことからして、他の attributa から成る諸々の被造物は、反対に、何ら extensio を有し得ないことにはならないでしょうか。またこのようにして、attributa Dei の数だけ多くの世界を認める必要がありはしないでしょうか。こうなると例えば我々の extensio の世界が有すると丁度同じ大きさ(amplitudo)を有する alijs attributis constant 諸世界が存在することになるでしょう。そして我々が cogitatio 以外にはただ extensio しか認識しないように、そうした諸世界の被造物もその世界の attributa と cogitatio のみしか認識しないこと

私のスピノザ研究の覚書(四) (藤本)

になるでしょう……」^③という疑問を掲げ、更に続けて、この観点を「エチカ」第一部定理十の scholium 即ち「各々の実有はある sub attributo で考えられねばならないこと及びその実有がより多くの実在性を持つに（従って必然性と無限性とを表現するそれだけ多くの）^④ attributa がそれに帰すること、そうした^⑤ことほど自然に於て明瞭なことはない」という視点に照らして考えれば、「三つ・四つ、或はもっと多くの attributa を有する実有が存在するという帰結になりそうですが、貴下の証明からは各実有は唯二つの attributa のみから知られるに過ぎないのはなぜでしょう^⑥か」という疑問を投げ掛けている。また E.W. Tschirnhaus も 1675 年 8 月 12 日に、スピノザへ書簡を送り、^⑦“substantia cogitans, et substantia extensa una, eademque est”という考えを述べている「エチカ」第二部定理七の scholium から、^⑧「世界が確かに唯一であることを推測できますが、反面またそれは無数の仕方で表現されること、従ってまた各々の個物も無数の仕方で表現されることが同様に明らかであります。これからして、私の精神を構成する modificatio と私の身体を表現するそれとは同じ一つの modificatio であるとはいえ、やはり無数の仕方で表現されることになるように思われます。即ちそれは cogitatio によって、次は extensio によって、第三には我々に未知な attributum Dei によって表現され、このようにして無限に進むように思われます。なぜというに attributum Dei は無限に多く存し、そして modificationes の秩序と連結は総てのものに於て同一であるように思えるので^⑨す」と自分の見解を開陳した上で、「精神が一定の modificationes を表わし、そしてそれらが、単に、extensio によってばかりでなく無数の他の仕方で表現されるものとすれば、何故精神は単に extensio によって表現される modificatio 即ち人間の身体のみを認識し、alia attributa による他の表現を認識しないのですか^⑩」という疑念を問質している。これらの書簡に対して、スピノザは 1675 年 7 月 29 日に Scheler へまた同年 8 月 18 日には Tschirnhaus へ返書を送付し、^⑪帰謬法を用いずに直接的・積極的な論理方法で応答している。即ち彼は全自然は一定の仕方で存在し且つ作用するように神の本性の必然性から決定されており、各々のものはその定められた本質から必然的に生ずること以

外の如何なることをもなし得ない、言い換えれば各物の能力はそのものの本質^⑫によってのみ規定されるという「エチカ」第三部定理七の demonstratio 及び人間の精神を構成する観念の対象は身体であり、現実^⑬に存在するある extendi modus であって、それ以外の何物でもないとする同第二部定理十三の視座の下、「人間精神は、本質として、現実^⑬に存在するある物体の観念に包含されているもの、或はこの観念から導き出されるもののみ認識することが出来ます……物体のこの観念は cogitatio と extensio 以外の他のどんな attributa Dei をも包含乃至表現しません。というのは、この観念の対象 即ち物体或は身体は神が sub alio attributo で考察される限りに於てではなく、sub attributo extensionis で考察される限りに於て神を原因に有し、従って身体^⑬のこの観念も神が単に sub extensionis attributo で考察される限りに於てのみ神の認識を包含します。次にこの観念は cogitandi modus である限り、矢張神が sub alio attributo で考察される限りに於てではなく、res cogitans である限りに於て神を原因に有し、従ってこの観念の観念も、神が sub attributo cogitationis で考察される限りに於て神の認識を包含します。これからして、人間の精神即ち身体^⑬の観念はこの二つ以外には何ら神の他の attributa を包含乃至表現しないことが明白である故、この二つ以外には神の何らの attributa をも認識し得ないのです」^⑭と帰結している。そもそも彼の立場は、意識的に自己の考えをおさえ、スコラ的理念で作成した「形而上学的思想」第一部第二章は別問題として、神は総てを優勝的に (eminenter) ではなく形相的に (formaliter) 含むという視座、即ち「原因が結果の総ての实在性を結果と同じ程度に含む」^⑮という観点に基づいているのであり、このことは、特に具体的に、「完全たる神の決定と善悪の存在」^⑯に関して取り交した Guilielmus de Blyenbergh との数回に渡る往復書簡^⑰の中でスピノザが繰り返し立論している欠如 (privatio) と否定 (negatio) 概念に明確に現われている。即ち彼は「我々は同じ類に属する総ての個物を、例えば人間の外形を有する総てのものを同一の定義で表現し、そしてこの為我々は総てのものがこの定義から導き出され得る最高完全性に同等に適當すると判断します。しかしその行為がこの完全性と矛盾するあるものを発見するとき、我々はその

ものを以て、そうした完全性を欠如し、またそのもの自身の本性から逸脱していると判断するのです。……神はものを抽象的に認識する事をせず、またこの種の一般的定義を形成することもしないのであり、またものには神の知性と能力によって許され且つ実際に与えられた以上の実在性が属することはないのです^⑱」とか、「欠如とは我々がものを相互に比較する時に形成する *wezen van reeden* 或は *cogitandi modus* にすぎないのです……例えば盲目者を目して彼は視力を欠如していると言います。これは我々が兎角彼を視るものとして表象するからです……詰り彼の本性を他の人間の本性と比較するか或は彼の過去の本性と比較して考察する時、視力が彼の本性に属すると考え、そしてその為我々は彼が視力を欠如しているというのです。しかし神の決裁とその決裁の本性を考察するとき、その人間が視力を欠如しているとは言い得ないのは石が視力を欠如していると言い得ないのと同様です。なぜなら、その時期には石に視力が属していないと同様の当然さでその人間には視力が属していないのですから^⑲」と認め、従って神の本性に関してはその視力は欠如ではなく否定なのであり、かくして「欠如とはあるものの本性に属すると我々の判断することをそのものについて否定することに他ならないし、否定とはあるものの本性に属しないところの事をそのものについて否定することに他ならない^⑳」と結論づけているのである。従って、この欠如という概念に照らして考えれば、神のなかに形相的に存在している我々にとって、*attributa* のうちの *cogitatio* と *extensio* だけしか認識可能ではないという見解を打ち立てても何の矛盾も生じないのである。詰り存在する一切は他物と関係なしにそれ自体で見る限りある完全性を含んでいると判断し得るものの、この完全性はどんなものに於てもそのものの本質自身の及ぶ範囲まで及ぶに過ぎない^㉑のである。

扱てまた、*attributa* の数だけ多くの世界を認めなければならないのではないのかという点については、「各物は神の無限な知性の中では無数の仕方で表現されますけれども、しかしこの表現された無数の観念はある一個物の単なる一精神を構成することが出来ずに無数の異なった精神を構成します」が、それは「エチカ」第一部定理十及び同第二部定理七それぞれの *scholium* を「参照

②②
して頂きたい」旨認めている。詰り、それらの scholia に照らしてこの課題について考えれば、「無限知性に於る無数の異なる表象の存在」という見解は，*attributa substantiae* が相互に何らの連結を有せず、それ自身によって考えられねばならないという観点に基づいているものと推測することができるものの、とはいえ、*substantia* の有する *omnia attributa* は常に同時に *substantia* の中に存し、且つ一が他から産出され得ず、各々は *substantia* の実在性或は有を表現する構図になっている故、唯一の *substantia* に多数の *attributa* を帰することは少しも不条理ではないということになり、従って *attributa* の数だけ多くの世界を認めなければならないというような理論は成り立ち得ないのである。

ところで、こうした往復書簡を通して問題になるのは、スピノザが単一性を本質とする *substantia* に *infinita attributa* という数の概念を適用しているのではないのかという疑問である。*attributa Dei* の数だけ多くの世界を認め、且つ表現する必然性を主張するといった、言い換えれば、多様な *attributa* を「一・二・三……」という数系列的観点で捉え、*substantia* それ自体は *extensio* と *cogitatio* という二つの数を含む系列の無限な総和として措定している二人の質問者の立場は別として、長さ、幅、深さという表象概念としての数詞を絶対に無限な *substantia* に用いること程不条理なことではないとするスピノザの立場については是迄の作業で検討してきた通りであり、そういった意味では大きな矛盾に陥ると思えるからである。一見してスピノザは、S. Hampshire が示唆する如く、神が何一つ否定を含まない完全で無限な存在であるという点で *attributum* の数も無限であるといった結論を下しているように見える。②③何故なら、「短論文」第一部第二章注で「最も完全且つ無限で全的なものとしての神は無限で完全な *alle eigenschappen* を有せねばならない」②④と記述しているし、「エチカ」第一部定理十六や同定理十七 *scholium* では神の本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方で、言い換えれば無限の知性によって把握され得る総てのものが生じなければならないと論じているからである。②⑤また本質を表現し何の否定をも含まない事柄と *infinita attributa* とを同一視して

いる「エチカ」第一部 定義六、同第一部 定理十三 scholium 及び同定理八 demonstratio, scholium I・II、^{②⑥} 或は凡そものがより多くの実在性及至有を持つに従って、それだけ多くの attributa がそのものに帰せられるという「エチカ」第一部定理九、^{②⑦} 且また神或は各々が永遠・無限の本質を表現する substantia constans infinitis attributis は必然的に存在するという同定理十一等が散見されるのである。詰り、これらの諸項目から一瞥して、スピノザは infinita attributa 即ち神の完全性(全)といった構図を念頭に於て後者から前者の裏付けを試みているのではないのかという解釈が成り立つのである。^{②⑨} だがこれはスピノザ本来の理論からいって妥当性に欠く釈義であるといってもよいと思える。J. Bennett が infinita attributa を全と同一視するのは論理的な誤りというよりも意味上から来るものと指摘し、^{③①} 工藤教授が Erhaltdt の見解を引用しながら神の無限性や完全性から infinita attributa を導き出すといった方法論的不条理について説明している事からも伺いし得る様に、抑無限性とか完全性というタームは数的概念に固執して考えれば、神について数え上げられ得る単なる特質を示すに過ぎず、substantiae essentia たる infinita attributa の概念をそのタームに求める論理方法には無理があるといってもよいと思える。^{③②} 数系列的特質から本質を導き出す論理に陥ってしまうのである。寧ろ、書簡三十六の一節に着目して infinita attributa と substantia との関係を検討してみた場合、attributa の数系列的組み合わせから成る総和という視点を採用すべきではないのではないのかと思える。というのは彼は^{わざわざ}態態同書簡の中で「若し我々が自己の類に於てのみ無限定的且つ完全であるところのあるものが自己の能力によって存在することを認めるなら、絶対に無限定的且つ完全な実有の存在もまた認めなければならない」^{③③}と縷述して、ある一つの attributum を認識するだけで essentia substantiae constans infinitis attributis 認識し得ると考えているのである。このことは Wolfson が substantia は無限に多くの aspects を持っている^{③④}と解釈し、Bennett が神は infinita attributa を持つという場合、それはあらゆる可能な基礎的方法で存在することを意味すると捉え、^{③⑤} 且つまた omnia attributa は唯一で同じ質の事柄である^{③⑥}とか、自己の類に於ける無限或は相対的な無限の

総体を絶対無限が表すのではないと考える者もいる如く、^{③⑦} infinita attributa を数的に虚構乃至表象して substantia を把捉するような方法を取るべきではなく、無限数即無限質乃至無限相という視点に立って非数詞的 attributa の諸相として捉える必要があると思える。詰り、諸相としての多くの attributa を同時に示す substantia として把握すべきなのであり、^{③⑧} 「神に無限に多くの現われかた、働きかたを許すことなのである」^{③⑨}。

五 エピローグ

是迄での作業を通して、extensio 概念の可・不可分性の整理という自然学的観点や無限知性と数詞的表象知覚に関する認識論的視座から、或はスピノザが思慮深く取り組み続けた当時の種々の無限概念と attributum 及び substantia に関する無限概念との比較細検結果や規定という範疇が内包する否定性、また「一と多」といった substantia と attributa との内面的連関についての分析等を基にプロローグで掲げた諸課題の検討を遂行しながら、スピノザが展開している attributum の梗概内容把握作業に努めてきた。こうした諸作業から、自己の類に於て無限な attributa は絶対に無限な substantia に帰属し且つその中で実在するというダイナミックな構造、逆に言えば、substantia は attributa たる諸相を通して自己を表現するという構図が明確に描き出されてきた。しかもその場合、同質を意味する substantia と attributa との関係を規定するのは無限知性であった。そこではアリストテレスの *κενὸν* や Bruno の *etere* といった種の概念は否定されるとともに、attributa には *wezen van reeden* に過ぎない「全体と部分」や「大いさ・時間・数」というような *Kategorie* は妥当しないといってもいいものであった。それらは単に *wyze* の中にのみ起こるものと考えられるからであった。従って、また当然、そこではデカルト的「物質即 extensio」から成る attributa の分割という理念は捨象され、extensio の分割・不分割という観点は表象認識と知性による認識の別から生じるに過ぎないものとするスピノザ独特の見解が看取された。

ところで“*attributa substantiae tribuere*”という視座、言い換えれば *attributa* を通した *substantia* の自己認識という 見解を取る点でスピノザは、*cogito, ergo sum* の命題の下に、無媒介的に直観される *ergo* 即ち全てに先行する Je それ自身に「操作肢と視規定肢」から成る動的な認識メカニズムの core^① を指定して、窮極的に *ergo* を *home faber* 或は *homo ludens*^② 的に捉えあげようと試みたデカルトとは対照的に、直観によって知覚される「*substantia* 即神」に、*ergo* を離れ、主客構造の core を築き上げて偏性から解放された本質認識を求めたものといってもよいと思える。但しその場合、彼は *substantia* を抽象的乃至集合的普遍の総合体として、或は不動の秩序として捉えていないことに注意を要する。*substantia* は規定肢として実在するとともに種種の特殊的個別的な諸相を自己の中に含み且つ *attributa* として被規定肢たる自己を表現するというような構造を持っているのである。詰り、諸物を潜勢化し、収束して、一般的抽象的に点や線と化していく方向を避けようと試みているのである。^④ 正にスピノザに於る *substantia* の構造は「一」にして「多」の仕組で構成されているのであり、この構図を十全なものとする為に *attributa* の意義が存在するものといってもよいといえよう。むろんここには、作業三で検討した如く、有限知性しか持たない我々は全ての *attributa* を知ることが出来ないという問題があり、これに窮した彼は *privatio* や *negatio* という概念を採用してそれに対処してはいるものの、充分とはいえないように思える。前章で問題となった如く、この点を十全なものとするには無限知性と有限知性との溝を埋める積極的な理論が要請されるからである。

注

一. プロローグ

- ① スピノザの初期の文献に於る *substantia* 複数説や *substantia* と *attributum* との混同についての問題に関して、既に覚え書き(三)で詳細に取りあつかったので、この章ではこの点については触れず、彼本来の *attributum* 及び *substantia* の定義をもとに論を進めることにする。
- ② 即ち「改善論」の完成時期と *substantia* 理論の構築・発展・完成過程からそのように考える事が出来るのである。

- ③ TdIE, pp. 35～36.
- ④ Ep., 50, p. 240. もとオランダ文であったが、今は紛失し、スピノザによってラテン文に訳された書簡が残されている (Spinoza Opera IV, Textgestaltung S. 417, 以後 Ep.-Textgestaltung と略記する)。Jelles については覚え書き三第一節の注⑫を参照せよ。
- ⑤ この点については、新福敬二, 「スピノザ研究」, 有信堂, 昭和44年, 294～295頁に詳細な分析がある。
- ⑥ スピノザの神は原因と量に於ては無限定を表わすが、質に於ては限定されており、個物は質的にも量的にも、また原因的にも限定されていると Robinson は解釈している (Lewis Robinson, Kommentar zu Spinozas Ethik, Leipzig, 1928, S. 239 f.)。
- ⑦ Hegel Sämtliche Werke, 19, Dritter Band, Stuttgart, 1959, SS. 376～379. ヘーゲル全集, 14 b, 哲学史, 下巻の2, 藤田健治訳, 岩波書店, 昭和45年, 116～117頁。
- ⑧ Wilhelm Windelband, Einleitung in die Philosophie, Tübingen, 1919, 清水清訳, 玉川大学出版部, 昭和47年, 103～104頁, 原書を手に出るやむなく訳本を使用。
- ⑨ 工藤, 「前掲書」, 336～337頁, 清水 訳, 「前掲書」, 99頁。
- ⑩ K.V., I; VII, p. 44.
- ⑪ Ethica, I; definitio 6. pp. 45～46.
- ⑫ 注⑥参照せよ。
- ⑬ 工藤「前掲書」, 337頁, 新福「前掲書」, 324～325頁。
- ⑭ 覚え書き二第二節を参照せよ。
- ⑮ Ethica, I; prop. 15, schol., p. 57, II; prop. 7, p. 90.
- ⑯ K.V., I; VIII, p. 47. Ethica, I; prop, 29, schol., p. 71, I; prop. 31, dem., p. 72.
- ⑰ Ethica, I; definitio 4, p. 45, I; prop., 10, dem., p. 51.
- ⑱ 桂, 「前掲書」, 117～119頁。
- ⑲ Ethica, I; definitio 6, p. 45.
- ⑳ この点については、是迄多くのスピノザ研究者が指摘している様に K. Fisher と Ed. Erdmann で代表されるような 実在論的な解釈と主観的な解釈との対立があるが、もちろん私は実在論的解釈の立場にたつ。この解釈の対立については、ここでは意識的に触れないことにする。詳細については桂教授や工藤教授の「前掲書」を参照せよ。
- ㉑ J.G. Van der Band, Spinoza on Knowing, Being & Freedom, 1974, p. 117. 尚, 第一章六節をも参照せよ。

二. 第一作業

- ① K.V., I; II, p. 27. Ethica, I; prop. 14, corol., II, p. 56, II; prop. 1, p. 86, II; prop. 2, p. 87.
- ② substantia の有する全ての attributa は常に同時に substantia の中に存し、且つ一が他から産出されず、各々は substantia の実在性或は有を表現するからである。Ethica, I; prop. 10, schol., p. 52, II; prop. 6. p. 89, II; prop. 7, schol., p. 46. 桂, 「前掲書」, 140頁。新福, 「前掲書」, 340頁。
- ③ Ethica, II; prop. 7, schol., p. 90.
- ④ Ethica, I; definitio 2, p. 1.
- ⑤ Ethica, II; axioma 1~5, II; pp. 85~86. cogitatio について通常の知的・意志的作用の他、愛・欲望・その他全ての感情を含むと述べているのはその良き例である。勿論 extensio についても同様の事が具体的に論じられる。
- ⑥ ΑΡΙΣΤΟΤΕΛΟΥΣ ΦΥΣΙΚΗΣ IV 4. 212, a, Loeb Classical Library, Harvard, 1963. p. 312.
- ⑦ G. Bruno, De l'infinito, universo e modi, Firenze, 1958, pp. 531~532. 清水純一訳, 岩波文庫, 1982年, 246~247頁。
- ⑧ S-D.P.P., II; definitio 3, p. 181, II; definitio 5, p. 181. K.V., I; II, pp. 24~25. Ethica, I; prop. 15, dem., pp. 56~58.
- ⑨ S-D.P.P., II; prop. 5, pp. 190~191. 尚, Principia Philosophiae, I; 26, pp. 14~15, II; 18, p. 49, II; 18, p. 50, II; 20, pp. 51~52 をも参照せよ。
- ⑩ Ethica, I; prop. 15, s. hol., pp. 57~60. K.V., I; I, pp. 24~27.
- ⑪ 「運動と静止」については、特に, Ep., 64, pp. 277~278. Ethica, II; prop. 13 (axioma I-II, lemma I~VII, axioma I~III, lemma IV~VII), pp. 96~102. K.V., II; XXIV, pp. 88~95. を、量や数詞については Ep., 12, p. 55~58. Ethica I; prop. 15, schol., pp. 58~60. TdIE, 38~39. を参照にせよ。工藤, 「前掲書」, 116~127 頁。Wolfson, op. cit., pp. 262~295. Studia Spinoza, vol. 4; W.N.A. Kleber, Moles in Motu, Germany, 1988, pp. 165~173.
Ep. 64 は1675年7月29日付ラテン文による Schuller 宛スピノザ書簡。1677年にでた遺稿集の中のものが残されているだけで、原文はない (Ep.-Textgestaltung, S. 419). Schuller (1651~1679) はドイツ人医師でスピノザの臨終に立ちあったといわれている (Philosophische Bibliothek, 96 a, S. xxix. 以後 P.B. 96 a と略記する)。Ep. 12 は1663年4月20日付 Meyer 宛スピノザ書簡、遺稿集のものとライブニッツが原書簡またはその草稿から写したと思われるものが残っている (Ep.-Textgestaltung, SS. 390~391). L. Meyer (1630~1681) は哲学・神学・文学に精通していた医師でスピノザに「デカルト哲学原理」の出版を進め、且つそれへの序文を書いた (P.B. 96 a, SS. xxvi~xxvii).
- ⑫ de werkende oorzaak (causa efficiens) は八種類に分類される。即ち, 1. een

daarstellende oorzaak, 2. een inblyvende oorzaak, 3. een vrye oorzaak, 4. een oorzaak door zig zelfs, 5. minvoorname oorzaak, 6. de eerste ofte begginnende oorzaak, 7. een algemeene oorzaak, 8. de naaste oorzaak. である (K.V., I; III, pp. 35~36)。尚, Ethica では 1. causa immanens (I; prop. 18, p. 63), 2. causa prima (I; prop. 16, corol., III, p. 61), 3. causa libera (I; prop. 17, corol., II p. 61), 4. cause per se (I; prop. 16, corol., II, p. 61), 5. causa proxima (I; prop. 28, p. 70), 6. nullam dari causam, quae Deum extrinsece, vel inteinsece, praeter ipsius naturae perfectionem, incitet ad agendum <, maar dat hy uit kracht van zijn volmaaktheit alleen een werkende oorzaak l causa efficiens l is> という prop. 17, corol. I が minvoorname oorzaak を示すと判断し得る, からなる六種に分類整理しているが, この点については第二章で検討した如く, K.V. から Ethica にかけてのスピノザの理論的発展・完成の為の変化とみる事が出来よう。

畠中教授は, 訳書注で de werkende oorzaak について, それは何らかの結果を生ずる動力となる原因の事で, 成果原因, 動力原因, 活動原因, 期成原因, 作用原因といった訳も可能である事を示すとともに, スピノザはこの分類の仕方を Burgersdijk や Heereboord より踏襲したものと指摘している (畠中訳, 264~265頁)。

この解釈については文献の入手が不可能な為, 触れないことにする。

- ⑬ K.V., I; II. p. 24.
- ⑭ これは cogitandi modi を表すとしている。この概念については Cogitata Metaphysica, I; p. 233~237 に詳細な説明がある。
- ⑮ K.V., I; II, p. 24.
- ⑯ K.V., I; II, pp. 24~26.
- ⑰ K.V., I; II, p. 26.
- ⑱ Ep., 12, pp. 52~57, 35, pp. 181~183. K.V., I; II. pp. 22~26.
- ⑲ 詰り, 工藤教授が主張する様に, こうした三観点からスピノザはデカルトの様に物質の無限分割を考えなくとも vacuum や atomus の存在を否定出来たのである (工藤, 「前掲書」, 117~118頁)。
- ⑳ Ep., 32, p. 169~174. 1665年, 11月20日付, H. Oldenburgius 宛スピノザ書簡。遺稿集のみからしられる (Ep.-Textgestaltung, pp. 405~406). H. Oldenburgius については覚え書き一, 第一節注⑦を参照せよ。
- ㉑ Ethica, I; prop. 15, schol., pp. 57~58.
- ㉒ Ethica, I; prop. 15, schol., p. 58.
- ㉓ Ethica, I; prop. 15, schol., pp. 58~59.
- ㉔ Ethica, I; prop. 15, schol., p. 59.
- ㉕ Ep., 30, p. 166, 32, pp. 169~174. 尚, Ep. 30 は1655年9月頃スピノザが Oldenburgius へ宛たもの (Ep.-Textgestaltung, S. 404).

- ②⑥ 以下で説くように、これは知性と表象による認識の仕方を示すが、この点については「スピノザ『知性改善論』の分析」を参照せよ。TdIE, pp. 33~34. Ep., 12, p. 56.
- ②⑦ Ethica, I; prop. 15, schol., p. 59.
- ②⑧ デカルトは *Nam sanè multa sunt, in quibus etsi nonnihil perfectionis agnoscamus, aliquid tamen etiam imperfectionis sive limitationis deprehendimus; ac proinde competere Deo non possunt. Ita in natura corporea, quia simul cum locali extensione divisibilitas includitur, estque imperfectio esse divisibilem, certum est, Deum non esse corpus. (I; xxiii, p. 13)* とか、*Et quidem ex quolibet attributo substantia cognoscitur; sed una tamen est cujusque substantiae praecipua proprietas, quae ipsius naturam essentiamque constituit, et ad quam aliae omnes referuntur. Nempe extensio in longum, latum et profundum, substantiae corporeae naturam constituit; et cogitatio constituit naturam substantiae cogitantis. Nam omne aliud quod corpori tribui protest, extensionem praesupponit, estque tantum, modus quidam rei extensae; ut et omnia, quae in mente reperimus, sunt tantum diversi modi cogitandi. Sic, exempli causâ, figura nonnisi in re extensa potest intelligi. nec motus nisi in spatio extenso; nec imaginatio, vel sensus, vel voluntas, nisi in re cogitante. Sed è contra potest intelligi extensio sine figurâ vel motu, et cogitatio sine imaginatione vel sensu, et ita de reliquis: ut cuilibet attendenti fit manifestum. (I; LIII, p. 25)* と述べているのである。Oeuvres de Descartes, VIII-I, Principia Philosophiae, C. Adam & P. Tannery, Paris, 1973.
- ②⑨ Ep., 12, p. 56. Ethica, I; prop. 15, schol., p. 59. 工藤, 「前掲書」59頁。
- ③⑩ 新福, 「前掲書」, 321頁。
- ③⑪ Ethica, II; prop. 40, schol., 2, p. 122. K.V., II; I~IV, pp. 54~61.
- ③⑫ Ep., 12, p. 56.
- ③⑬ 第三章の二節, ③「各論について」を参照せよ。
- ③⑭ Ethica, I; prop. 15, schol., p. 60.
- ③⑮ しかしながら、やはりここでも、第三章で検討した様な無限知性と我々の有限知性との間に深い溝が存在しているにも拘らず、スピノザはそのことについて何も触れていないことに注意を要する。

三. 第二作業

- ① Ep., 12. この書簡には態態 *<van de Natuur van't Oneindig>* というタイトルが付いている様に、無限に関するスピノザの考えを理解するのに特に重要である。
- ② Ep., 12, pp. 52~53. 尚、新福教授も「前掲書」349~341頁でこの点について詳細に論じている。

- ③ Ep., 12, p. 53.
- ④ Ethica, I; definitio 6, p. 45.
- ⑤ Ethica, I; definitio 3, p. 45.
- ⑥ 第一作業の注⑪で述べた 4. veye oorzaak, 5. minvoorname oorzaak を参照せよ。
K.V., I; III, pp. 35~36.
- ⑦ K.V., I; IV, pp. 59~61.
- ⑧ Ethica, I; prop. 33, schol., I-II, pp. 74~76.
- ⑨ TdIE, p. 34.
- ⑩ Ethica, I; definitio 6, explicatio. p. 46.
- ⑪ Ethica, I; prop. 12, p. 55. I; prop. 13, pp. 55~56. 第二章四節をも参照のこと。
- ⑫ Ep., 56, p. 261.
- ⑬ Ethica, I; prop. 21~23, pp. 65~67. Ep., 63, p. 276, 64, p. 278. K.V., VIII, p. 47, IX, p. 48. 尚, スピノザは Ep. と Ethica では *modus infinitus* を二種に分けて考えているがこの点については別の機会に触れることにする。
Ep. 63 は1675年7月25日付スピノザ宛 Schuller 書簡。これはアムステルダムの統一バプテスト教会の図書館に保存されている (Ep.-Textgestaltung, S. 421)。
- ⑭ Ethica, I; prop. 28, pp. 59~70, I; prop. 29, pp. 70~71 より。
- ⑮ *indefinitum* とはその限界が人間の知性によって探究され得ないところのものである。S-D.P.P., II; definitio 4, p. 181, II; prop. 5, schol., pp. 190~191. この概念は *Principia Philosophiae*, I; 26~27, p. 15 を引用したものである。
- ⑯ Ep. 12, p., 61.
- ⑰ *substantia* の存在は永遠の概念の下に, *modus* の存在は持続の下に於て説明し得る。ここでいう持続とは存在の無限定的な継続に他ならない。Ep., 12. pp. 54~55. Ethica, II; definitio 5, p. 85.
- ⑱ Ep., 12, pp. 56~57. Ethica, II; prop. 44, schol., p. 125, III; prop. 8, demonstratio, p. 146. 尚, この点については *Cogitata Metaphysica*, I; 4, p. 244. 及び *Principia Philosophiae*, I; 57, pp. 26~27. を併せて参照せよ。
- ⑲ Ep., 12, p. 57. この点については, Ethica, II; prop. 40, schol., I, pp. 77~78. *Principia Philosophiae*, I; 55, p. 71. をも参照せよ。
- ⑳ *wezen van reden (ens rationis)* とは認識された事物をより容易に記憶に保存し, 表象し, 説明するのに役立つ思惟の様態に他ならない。 *Cogitata Metaphysica*, I; 1, p. 233. 尚, Ethica, I; appendix, p. 83 ではこれを態態 *entia imaginatio* と表現している。
- ㉑ Ep., 12, p. 58. K.V., II; XVI, pp. 82~83. Ethica, II; def. 5, p. 85. これらの文献から読み取れる様に, ここでの持続 (*duratio*) とは存在の無限定な継続を意味する。

私のスピノザ研究の覚書(四) (藤本)

- ②② S-D.P.P., I; prop. 5, schol., pp. 190~191. この章の注①⑤を参照せよ。
- ②③ S-D.P.P., II; prop. 9~11, pp. 198~200. この例は Ep., 12, p. 59. でも取り扱われている。
- ②④ S-D.P.P., II; prop. 10, p. 199, II; prop. 11, dem., p. 200. 尚, () 内の語は著者挿入。
- ②⑤ S-D.P.P., II; prop. 10, p. 199.
- ②⑥ S-D.P.P., II; prop. 9, lemma, p. 199.
- ②⑦ Ep., 12, p. 60.
- ②⑧ S-D.P.P., II; prop. 11, p. 199. Principia Philosophiae, I; 34, pp. 59~60, I; 35, p. 60.
- ②⑨ Ep., 12, p. 60.
- ③⑩ Ethica, II; prop. 3, p. 87.
- ③⑪ Ethica, II; prop. 3, dem., p. 60.
- ③⑫ Ethica, I; definitio 4, p. 45.
- ③⑬ Ep., 4, pp. 12~14. オランダ文のこの原書簡は現在残されていないが遺稿集からしることができる (Ep.-Textgestaltung, S. 381).
- ③⑭ Ethica, I; prop. 16, dem., p. 60.
- ③⑮ Ethica, I; prop. 16, corol., 1, p. 60.
- ③⑯ 同様の事が Ethica, I; prop. 17, schol., にも見られる。
- ③⑰ 桂「前掲書」134頁。
- ③⑱ intellectus infinitus については Ethica, I; prop. 16, p. 60. prop. 30, p. 71, I; prop. 31, pp. 71~72. を参照せよ。
- ③⑲ Pierre Macherey. Hegel ou Spinoza, Francois Maspero, 1979, 鈴木一策他訳, 新評論, 1986年, 137頁。原書が手に入らず, やむなく訳本を使用。
- ④⑰ Ep., 36, p. 185. オランダ文による J. Hudde フッデ宛スピノザ書簡。スピノザがラテン文に訳したものが残されている (Ep.-Textgestaltung, S. 407). Hudde (1628~1704) はアムステルダムのレヘントの一員で, 同市の市長にもなる。特に, 確立論や光学にも関心を持っていた (P.B. 96 a, SS. xxx~xxxi).

四. 第三作業

- ① Ep., 63. これについては第二作業の注⑬を参照せよ。
- ② 証明を否定する事が不可能な方法を指す。
- ③ Ep., 63. pp. 274~275.
- ④ () の中の文は Ethica には有るが, Ep. にはない。
- ⑤ Ethica, I; prop. 10, schol., p. 8.
- ⑥ Ep., 63, p. 275.
- ⑦ Ep., 65. Tschirnhaus については第三章, 第三節の注⑭を参照せよ。

- ⑧ Ethica, II; prop. 7, schol., p. 90.
- ⑨ Ep., 65, p. 279.
- ⑩ Ep., 65, p. 279.
- ⑪ Ep., 64, pp. 277~278. 66, p. 280. この書簡のやりとりについて, Jonathan Bennett, *A Study of Spinoza's Ethics*. Hackett, U.S.A., 1984. pp. 77~78. 及び E.M. Curley, *Spinoza's Metaphysics*; Harvard University Press, pp. 147~148 等をも参照せよ。
- ⑫ Ethica, III; prop. 7, dem., p. 146.
- ⑬ Ethica, II; prop. 13, p. 96.
- ⑭ Ep., 64, pp. 277~278.
- ⑮ この点については, 第一章, 第二節及びそれに付した注を参照にせよ。
- ⑯ S-D.P.P., I; axioma 8, p. 55. K.V., I; 2, p. 22. Ethica, II; prop. 7, p. 98.
- ⑰ EP., 18 (12, 12, 1664), 19 (1, 5, 1665), 20 (1, 16, 1665), 21 (1, 28, 1665), 22 (2, 19, 1665), 23 (3, 13, 1665). 尚, 彼については第一章第一節注⑩参照せよ。
- ⑱ Ep., 19, p. 91. Ep. 18. 1665年1月5日, への返書。もとオランダ文。スピノザによりラテン文に訳されたもの及びその文から更にオランダ文に訳されたものが残る (Ep.-Textgestaltung, pp. 394~396)。
- ⑲ Ep., 21, pp. 128~129. 原書簡はオランダ文。スピノザによってラテン文に訳されたものが残る (Ep.-Textgestaltung, S.S. 398~400)。
- ⑳ Ep., 21, p. 129.
- ㉑ 本質と完全性は同質とみなされる故。Ep., 19, p. 89.
- ㉒ Ep., 66, p. 280. 1675年8月18日付 Tschirnhaus 宛スピノザ書簡。遺稿集からのみしられる (Ep.-Textgestaltung, S. 424)。
- ㉓ Stuart Hampshire, *Spinoza*, London, 1956, p. 56 ff. H.A. Wolfson, この点を重視すれば, ユダヤ中世の哲学者クレスカやアルボの考えと同じであると指摘している (H.A. Wolfson, *The Philosophy of Spinoza*, I, p. 225)。
- ㉔ K.V., I; II, p. 19.
- ㉕ Ethica, I; prop. 16, p. 60, I; prop. 17, schol., p. 62.
- ㉖ Ethica, I; definitio 6, p. 45, I; prop. 13, schol., pp. 55~56, I; prop. 8, schol., I. II, pp. 49~51.
- ㉗ Ethica, I; prop. 9, p. 51.
- ㉘ Ethica, I; prop. 11, p. 52.
- ㉙ J. Bennett, op. cit., pp. 75~77.
- ㉚ J. Bennett, ibid., p. 75.
- ㉛ 工藤, 「前掲書」, 170~171頁及び6 「無限の延長概念について」 1の注⑩, 282~283頁をも参照せよ。

- ③② Ep., 36. Johanni Hudde 宛スピノザ返書1666年6月頃(第二作業注④⑩を参照せよ)。
- ③③ Ep., 36, p. 185.
- ③④ Wolfson, op. cit., p. 226.
- ③⑤ Bennett, op. cit., p. 76.
- ③⑥ Curley, op. cit., p. 144.
- ③⑦ 工藤, 「前掲書」, 279~280, 284頁。尚, 同教授はこの点で Stanislaus von Dunin Borkowski, S.J. (Spinoza., S. 43) の理論について触れているが, 原書を手に出れないので指摘しないことにする。
- ③⑧ Curley, op. cit., p. 158.
- ③⑨ 高坂正顕著作集, 4, 理想社, 1964年413頁。

五. エピローグ

- ① 高瀬教授がホセ・オルテガ・イ・ガセー理論の分析を遂行するなかで取り扱っているデカルト解釈をそのまま借用させていただいた。教授は, 「この cogito はいうまでもなく一人称である“私”の中にあっての cogitare 即ち操作肢を示すものであり, また sum はこの私の中での被規定肢に対応するものであることは明らかであって, ここに既に個内構造式で作動している二肢が意識象面で論理化され, 提示されているとみることができる」と説明している。高瀬学, ホセ・オルテガ・イ・ガセー初期二手稿の意義分析, 政経論叢, 国士舘大学政経学部, 昭和61年, 107頁。
- ② 時代の隔たりは有るものの, J. Huizinga が主著 Homo Ludens, で人間を homo sapiens, homo faber, homo ludens と捉え, その観点から cultuurverschijnsel を論じているが, 正にその思考方法的萌芽をデカルトの ergo に見出し得るのである。J. Huizinga, Homo Ludens, H.D. Tjeenk Willink Groningen, 1974.
- ③ cogito, ergo sum についての解釈の仕方には今日まで, 種類論議されて来ているが, ここではこの点については触れないことにする。この点については, 高瀬学, 「前掲書」, 及び「現代思想特集デカルトの世紀」Generosite et Phenomenologie, Jean-Luc Marion, PUF, 1988, ジャネロジテと現象学, 大西雅一訳。192~205頁, 等を参照せよ。
- ④ 高瀬学, 「前掲書」, 56頁。